

大学生における大学生生活不安に関する要因の検討

1007074

鈴木 萌

【目的】

近年、大学生のひきこもりや不登校の問題が深刻化している。2008年末に厚生労働省により行われた調査では、全国の大学生約280万人のうち、不登校は2.9%に当たる8万1000人で、うち2万8000人がひきこもりの可能性があるとして報告されている。これらの病理現象の背後には、大学生の未熟さと同時に、“不安”が存在している。本研究では大学生を対象として、大学生生活不安に影響を与えている要因を、対人関係、大学への愛着度、性格特性、の3方向から検討していく。学生が抱える不安について調査し、その要因を明らかにすることは、大学不適應や不登校、登校拒否など教育現場の深刻な問題にアプローチする重要な手がかりになるであると推測される。

【方法】

被験者は北海道の私立大学に在籍する大学生272名（男性74名、女性198名）であった。

質問紙は、大学生生活不安を測る「日常生活不安」13項目、「評価不安」11項目、「大学不適應」5項目、「社会的スキル」を測る18項目、「大学愛着度」を測る7項目、性格特性を測る「抑うつ性」10項目、「神経質」10項目で構成されている。

【結果と考察】

大学生が抱く不安に性別、学年が関係しているかどうかを検証した結果、性別は関係しておらず、日常生活不安、評価不安にのみ学年が関係していた。日常生活不安は、学年間の差は見られなかったが、評価不安においては、4年生と1年生、2年生との間に差が認められた。学年が上がるにつれて、不安は低くなっていた。大学生が不安を抱くのは、高校から大学への環境の変化によってだと考えられる。高校までは、クラスという居場所が与えられるが、大学では居場所は自分で確保しなければならない。よって大学生生活に慣れていくと、つまり学年があがるにつれて大学生生活に抱く不安は軽減されていくのだろう。

日常生活不安、評価不安、大学不適應の間に相関があるかどうか検証した結果、すべての不安相互間に正の有意な相関が認められた。日常生活不安が高い人は、評価不安も高く、日常生活不安が低い人は評価不安も低い傾向にあるということ、大学不適應が高い人は日常生活不安、評価不安も高い傾向にあると示された。このことから、大学生が抱く大学生生活不安は、日常生活不安と評価不安の一方、もしくは両方を抱いたことで、大学不適應も抱くと考えられる。

社会的スキル、大学への愛着度、性格特性（抑うつ性、神経質）が不安尺度にどのくらい影響を与えているのか検証した結果を表1に示す。社会的スキルは日常生活不安と評価不安に負の影響を与えていた。また、大学不適應には正の影響を与えていた。大学への愛着度は大学不適應にのみ負の影響を与えていた。抑うつ性は日常生活不安と大学不適應に正の影響を神経質は日常生活不安と評価不安に正の影響を与えていた。大学生生活で抱く不安に関しては、性格特性の影響よりも社会的スキルの影響の方が強いことが示された。社会的スキルが高い人は大学生生活で抱く不安を、要領よく処理することができているといえるだろう。現在は、ほとんどの学生が不安を抱いている。本研究では大学生生活での不安にどのような要因が関係しているのかを明らかにすることを目的としていたが、求めたい不安が幅広くなり過ぎていたことが問題であったと考える。そのために今後は、より求めたい不安を具体的にしていく必要があると考える。

表1 不安尺度と社会的スキル、大学への愛着度、性格特性の重相関分析

独立変数	標準化係数		
	不安尺度		
	日常生活不安	評価不安	大学不適應
社会的スキル	-.291***	-.309***	.125*
大学への愛着度	.092	.089	-.42***
抑うつ性	.202**	.12	.176*
神経質	.159*	.218**	.081
重相関係数	.484	.484	.491

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

(指導教員 豊村 和真 教授)